

設立 平成24年 5月 15日  
開塾 平成24年 9月 8日  
発行 平成27年 5月 9日  
(34号)



[事務局] 〒648-0094  
橋本市三石台4-1-15  
TEL 0736-38-3669  
FAX 0736-38-3680  
文書 事務長 宮本眞弓

人間学講座  
第35講

「昭和天皇の御遺徳」

御製を中心

野口芳宏先生



■ 教育は「人」

「**「**昨日、子どもや若者をめぐる問題は、どうも芳しくない。教育に携わっている私としては肩身の狭い

思いです。そのような状況を受け「道徳」が今後教科として取り入れられることになりました。道徳が教科となることで、果たして日本の教育は良くなっていくのか。道徳が特設されたのは昭和三年のことです。それまでは道徳はなかったわけですが、それ以前と以降で、日本の子どもは良くなったのかというと、必ずしもそうは言えない。ここに「制度」というものの限界があります。私自身良くなってくればいい、という願いはあるが、制度論には期待はできないと思っています。

なぜなら、結局教育とは「人」なのです。つまり「教師」が大事。いい先生に出会うと子どもは良くなる。「制度」ではなく「人」なのです。教師の資質の向上が、何よりも大事なテーマです。そのためには企業同様、教師もまた研修が行われています。この「研修」という熟語は、中国から来た言葉ではなく日本語なのですが、その意味は、「研究」と「修養」です。教育基本法第九条では、教員は「絶えず研究と修養に励み」とある。学校には多種多様の研究会はあれど、修養会など一つもない。

教師が研究会でしていることは「子どもの導き方」。授業の仕方、指導の仕方等、これらはみな「他者改善」。先生方は、子どもを高めることばかりやっていて、自分を高めることを忘れておられる。いくら一生懸命やっておられても、それが改まらない限り、成果はないのではないか。「修養」とは「自己改善」のことです。

他者改善をするために必要なことは「伝え方」です。いかに子どもたちに伝えるか、伝達の技術が大切でしょう。研究で磨くのは、その伝え方の方法・技術です。そうして伝えられたことをいつまでも覚えていかるといえば、試験が終わった途端忘れてしまう、ということも少なくない。伝達というのは、教育の中で確かに大切なことです。伝達とともにさらに大切なことは、感化ということ。伝達されたことは消えるが、修養によって自己改善された先生の言葉というのは動かしがたい影響がある。いくつになってもその言葉は残り、人生を感化することになる。伝達力ではなく感化力を高めるには、自己改善に目を向けなければなりません。残念ながら今の日本の教育は自己改善の点において問題があると思っています。

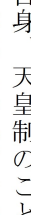
## ■日本の誇り「天皇制」

戦後の教育で何が失われたか、それは国家ではないか。いつからか国家よりも個人、むしろ国家が個人の敵でもあるかのように思われている。言うまでもなく国家の中に個人がある。日本という国の理解を深めなくてはいけない現状にあります。日本だけが固有に持っている世界に誇れるものとは何か。それは「天皇制」ではないかと思えます。

しかし、教育界では、天皇の話をするなどはタブーなのです。この国の最も誇れることを話すことができない現状、だから教育は良くならないのです。



私自身 天皇制のことを深く学ぶにつれ、その素晴らしさは確信となっていきました。



生活する上で一番大切なことは、おそらく「安心」でしょう。安心を支



えるものは「安定」、安定していなければ、体調であれ人間関係であれ経済的なことであれば不安になります。安定は「秩序」の支えがあるからです。

国家の代表は元首です。教師の中にも日本の元首が総理大臣だと思っている人は多い。日本の元首は天皇であり、日本は他国に類のない、一系で一二五代続いている君主国です。ほかの国と日本では何が違うのか。それは、天皇が国民の尊敬と信頼の存在だからです。そこにきちんとした秩序が続く理由があるのです。

天皇の一番のお仕事は「祈り」。日本国民の幸せと世界の平和を祈るというのがお仕事の中核なのです。私たちは祈られている存在。そういう元首をいただいているのがわが国であり、それは改められることなく、ずっと続いているということ

は、まさに誇りです。

## ■ 昭和天皇の御製より

昭和天皇は東宮御学問所で帝王学を学ばれ、これに倫理学の杉浦重剛先生からは「自らの徳を磨き臣下や国民に慕われるような元首たれ」と教育を受けられます。日本の天皇は象徴なので直接発言はなさいませんが、歌にその思いを託されておられます。

世のなかにかくあらまほしおだやかに

朝日にほへる大海の原

世の中がこうあったらいいものだ。というやがて元首になる昭和天皇二十一歳（大正十一年）のときの歌。

あらたまの年をむかへていやすは

民をあらはれむところなりけり

大正十三年関東大震災の翌年の新年の歌。国民の悲しみを我がこととして詠んでおられます。

天皇のこのようなお姿が国民に愛される由縁です。教師もまた、徳を磨き慕われる存在となつたとき、学校も大きく変わるに違いありません。

（抄録 中川千都子）



## 《グループ討議》

野口芳宏先生の講義を拝聴したあと、塾生が各グループに分かれ講話内容について討議しました。グループごとにまとめられた感動語録を発表しました。

## 【Aグループ】

- ① 自己改善
- ② 和Ⅱ日本人の心
- ③ 研修Ⅱ研究＋修養

## 【Bグループ】

- ① 秩序は差別から
- ② 現在の教育に問題がある
- ③ 感化

## 【Cグループ】

- ① 研修Ⅱ研究と修養の意味と感化
- ② 国民は安定を求めている  
安定↓秩序↓差別
- ③ 日本の心は和の心

## 【Dグループ】

- ① 象徴Ⅱお手本という意味の重要性
- ② 研修Ⅱ研究と修養
- ③ 教育Ⅱ自己改革が大原則

## 【Eグループ】

- ① 自己改革について  
…研修の意味・修養の重要性
- ② 和について  
…日本人の核である
- ③ 実践について



## 《読書会》Aグループ

- ・進行 野依佐千子 塾生
- ・テキスト 森信三先生『一語一会』
- ・指導 近藤宏枝 塾生

4月3日

節約は物を大切にするという以上に、わが心を引き締めるために有力だと分かって人間も初めてホンモノとなる。

4月8日

お互い人間として最も大切なことは、単に梯子段を一段でも上に登るといふことにあるのではなくて、そのどこか一ヶ所に踏みとどまって、おのが力の限りハンマーを振るって、現実の人生そのものの中に埋もれている無量の鑽石を発掘することではなくてはならぬからです。

4月15日

しつけの適期についてですが、それは幼稚園に入る前後から小学校に入るまでに三つの根本的なしつけを完了しなければなりません。それがその子どもの一生にわたって、人間形成の土台になるわけです。

4月19日

人間五十ともなれば、何らかの行を成して、多少は人に報ゆる処なかるべからず。

講師の野口芳宏先生も傍聴参加頂きました。左記の語録を選ばれ解説頂きました。

4月8日 右に掲載

4月9日

教育とは、結局人間を植えることであり、この現実の大野に、一人ひとりの人間を植え込んでいく大行なのです。それがいかに荘厳な事実であることか。それは達識明眼の人でなければ、真の洞察はできないかも知れません。

## 《読書会》Bグループ

- ・進行 山路直美 塾生
- ・テキスト 「論語のこころ」巻3
- ・指導 宮武清寛 副代表

子曰、苟志於仁矣、無惡也。

二一レ

子曰く、苟に仁に志せば、惡しこと無きなり。

先生が言われました。「心から仁に志したなら、悪いことはなくなる。」

子曰、巧言令色、鮮矣仁。

子曰く、巧言令色、鮮なし仁。

先生が言われました。「言葉が巧みで、笑顔のある人には、あまり仁徳がないものだ。」

子曰、剛毅木訥、近仁。

レ

子曰く、剛毅木訥仁に近し。

先生が言われました。「無欲果敢で質実寡黙であることは、仁に近い。」



# 郊外学習 「東井義雄先生のふる里を訪ねて」

日程 4月29日



大阪なんば ← 東井義雄記念館 ← 東光寺 ← 講話 東井浴子さん ← 講話 野口芳宏先生 ← 出石城跡 ← 大阪なんば





『にんげんだもの』  
より

- ・タイトルはご自身で記載願います。
- ・提出先 學塾・中之島 事務局

○九〇一七五五五一八七七七（志村）

